

## 繁殖地・越冬地で個体数が減少

生息個体数の減少が懸念されているオオジシギの調査と、その生息地である勇払原野（北海道苫小牧市）の保全に向けたプロジェクトを、この夏からスタートします。

オオジシギは北海道を主な繁殖地とし、本州や九州、またロシア極東の一部でも繁殖が確認されています。環境省版レッドリストでは、本州中部で生息地が減少しているという理由から準絶滅危惧種（NT）となっています。また、北海道でも十勝地方で行なわれた調査で、1978～91年と2001年を比較して個体数が減少していることが指摘されています（※1）。さらに、越冬地であるオーストラリアでも越冬数が減少しているとされていますが、近年は調査が行なわれていないためよくわかっていません。また、渡りの主要な中継地も把握されていない中、渡りの際に利用すると考えられる内陸湿地の減少も懸念されています。

## 渡りの中継地として勇払を利用

当会では2000年からウトナイ湖サンクチュアリを中心に、「勇払保全プロジェクト」として勇払原野の鳥類調査を行ない（※2）、05年度末には「勇払原野保全構想報告書」をとりまとめ、行政機関等にその保全を働きかけています。01～03年の鳥類調査では繁殖期のディスプレイを確認し、1千29羽

- 繁殖を確認
- 繁殖の可能性あり
- 生息を確認



オオジシギの繁殖分布  
(1997～2002年 全国鳥類繁殖分布調査)

右・2012年、2013年にシブツナイ湖で繁殖したオオジシギ。足に標識のフラグをつけた



撮影／高嶋成人

## 「オオジシギ保護調査プロジェクト」がスタートします

のオオジシギに装着した標識やフラグから、当地が重要な中継地であることも判明しました（※3）。10年にわたる働きかけの結果、勇払原野は遊水地としての利用が決定し、湿地環境が確保されることになりました（※4）。一方で、勇払原野はこの10年間でプロッコリーの大規模試験栽培用地として利用されるなど、生息環境と個体数の減少が懸念されます。

## オオジシギと勇払の自然を保全

そこでこのプロジェクトでは、勇払原野を含め、主要繁殖地である北海道におけるオオジシギの生息状況とともに、衛星追跡により渡りの中継地や越冬地を明らかにすることで、保護すべき地域や環境を特定し、保全活動に結びつけていきます。また、今年からスタートした「全国鳥類繁殖分布調査」と連動して、全国での繁殖状況の把握を行ないます。さらに、プロッコリー栽培などに利用されてきた土地を、もう一度オオジシギをはじめとした野鳥の好適な生息地に戻すための手法を明らかにしていきます。

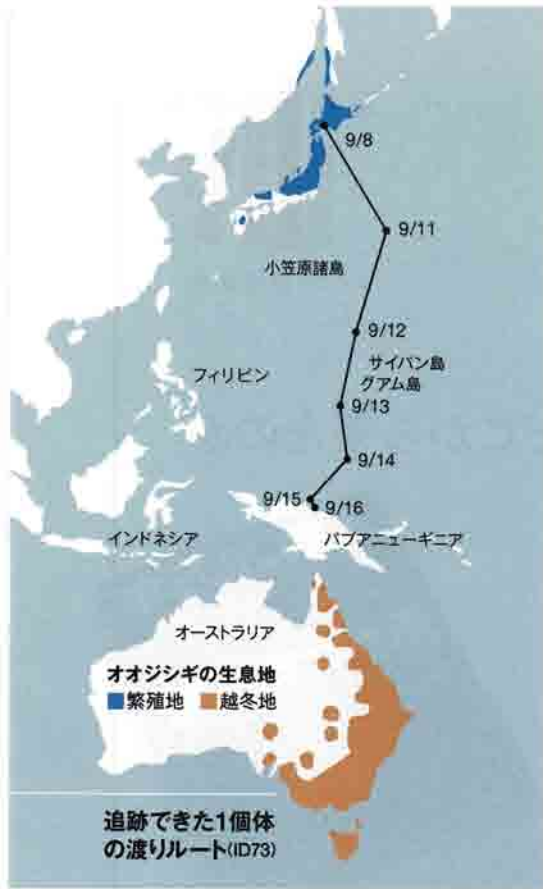
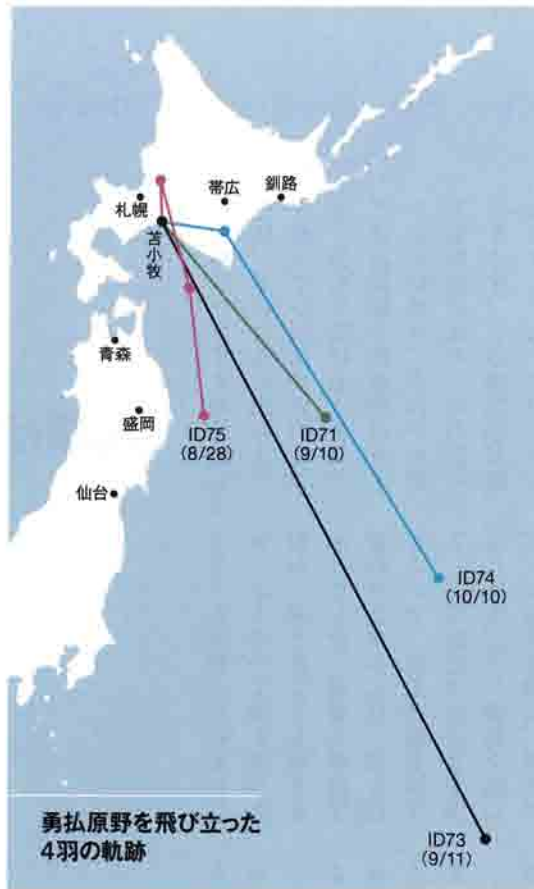
オーストラリアでオオジシギの越冬する湿地の調査や普及活動を行なっている研究者やNGOの来日も予定されており、今後は国際連携も目指していきます。

◎このプロジェクトは、長年ウトナイ湖サンクチュアリをご支援いただいた故・越崎清司様からのご遺贈を活用させていただきます。

※1北島幸恵・藤巻裕蔵 2003 北海道十勝平野におけるオオジシギGallinago hardwickiiの生息動向 山階鳥学誌, 35:12-18 2003

※2「野鳥」2001年9・10月号 ※3「野鳥」2002年8月号 ※4「野鳥」2015年4月号

# オオジシギの渡りルートの一部が 解明されました



◎このプロジェクトは、故・越崎清司様からのご遺贈を元に実施されています。

## ●オオジシギ保護調査プロジェクト

当会では勇払原野（北海道苫小牧市）を中心に、オオジシギのおかれている現状を調査し、オオジシギとその生息環境を保護することを目的としたプロジェクトに取り組んでいます。

初年度となる2016年は、渡りルートの調査に着手しました。調査方法は、標識による情報収集と衛星追跡の2つです。繁殖を終えて渡りを開始するまでの時期にあたる7月に、勇払原野で108羽のオオジシギを捕獲し、102羽にカラーフラッグと金属足環を付けました。また、体重155g以上の成

鳥5羽に、衛星追跡用の送信機を装着しました（「野鳥」2016年11月号24頁参照）。送信機を付けた個体のうち、1羽は渡り開始前に電波が途絶えましたが、ほかの4羽は、装着後しばらく、勇払原野を中心に約10km四方内を行動していました。しばらくすると、ID75は7月30日に約70km北上

し石狩平野の農耕地へ、ID74は9月26～27日に南東へ約200kmの日高山脈を越えた十勝平野へと移動し、この2羽は渡り開始までそこに滞在しました。ここでも行動範囲は10km四方程度でした。

最初に渡りを開始したのはID75で、8月28日に下北半島沖の太平洋上で電波が確認されました。その後、9月9日（推定）に2羽（ID71、73）が、10月9日（推定）に最後の1羽（ID74）が北海道を離れたことがわかりました。出発地点は勇



この個体が、はるかニューギニアまで追跡できたID73

払原野・石狩平野・十勝平野と異なりますが、どの個体も本州沿いではなく南東方向の太平洋へ向かいました。また、渡り開始日は個体によって40日以上の差がありました。

3羽は渡り開始後1日から2日で信号が消えてしまいましたが、ID73はその後、平均時速38kmで、東経140度から149度の間をほぼまっすぐ南下し、渡り開始から7日目の9月16日にニューギニア島の北岸へ到着しました。残念ながら、到着後すぐに電波が途絶えたため、越冬地

までは確認できませんでしたが、これにより世界で初めてオオジシギの渡りルートの一部が解明されました。

今回の調査によって、北海道で繁殖するオオジシギは、中継地なしでニューギニアまで一気に太平洋上を渡るものがあるようだということがわかりました。また、繁殖後、渡り

を開始するまでの間、北海道内を移動することもあることもわかり、勇払原野の役割を知る上でも重要な発見となりました。

今後は、越冬地での動向や春の渡りルート、繁殖後の動向などを明らかにするため、カラーフラッグの目撃情報収集を続けていきます。また、衛星追跡による調査は、オオジシギにとつてより負担の少ない軽い送信機が入手できれば実施します。来年度は、新たに勇払原野でのオオジシギ繁殖個体数調査を行なう予定です。